

---

# 君と俺と、ドライブ。

澤田しずく

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君と俺と、ドライブ。

### 【コード】

N8450V

### 【作者名】

澤田しずく

### 【あらすじ】

別々の道を作り始め、少し遠くにいつてしまった幼なじみの話。

山本さんと、ドライブに出かけることにした。  
なぜなら、山本くんが地元に戻ってきているからだ。  
お盆休み、ばんざい。

運転はもちろん俺。  
なぜなら山本くんはペーパードライバーだからだ。

高校を卒業して、県下トップの国立大学に進学した山本くんの行動範囲は、一人暮らしのアパートから自転車圏内に全ておさまっている。  
そりゃ車がなくても生きていけるはずだ。

同じ県内にいるのに、車がないと出勤すらできない、地元就職の俺とは大違いだ。

車をびゅんびゅんとはして山道に行く。  
少々の山道なら、仕事で慣れっこだ。

「先月君んちのアパートで会って以来だっ たっ けかな」

「うん、ちよつと久しぶりだね」

「そうだな、高校のときは普通に毎日会って た もんな」

「懐かしいねえ、あの頃は若かつ た なあ」

山本くんはへらへらと笑う。

ちよつとぬけてるところがあるけど、そこもまた君といて楽な理由のひとつだ。

車内には今流行りのロックをガンガンにかけている。

ロック調のアニソンのほうが俺は好きだが、山本くんの趣味は最近若者が好きな音楽路線になってきたので、俺が好きなの、でも山本くんも好きそうな流行曲に変えた。

まあ俺達ふたりとも、二十歳を過ぎたばかりなんだが。

「なあ、最近山本くんは、俺に話しかけてくれないよねえ」

「…そうかなあ」

山本くんは軽く首をかしげる。

「俺もつと君と話がしたいんだけどさあ、そこんとこどつなの？」  
「…別に話してると思っただけど」

そうじゃなくて、もっと俺とたくさん話をしようよって、

そう、今までみたいに、テンション上げて、どうでもいいことで馬鹿騒ぎして、楽しんでいたいって、そんなふうに思うんだけど。そこんとこどうなの、山本くん。

助手席に座った山本くんは、黙って進行方向を見つめている。運転しながらの横目でもわかる。

「そういえば山本くんは、もともとあまり自分から話しかけてこないよねえ」

「まあ、そうだねえ」

小学校の頃から引つ込み思案だった山本くんを、俺はいつも引つ張りまわしていた気がする。

山本くんはノーと言わないタイプだから、たまにしぶしぶ従っている感じがあった。

気付かないほど俺もバカじゃない。

ノーと言わない君にイライラすることも多々あるが、主張しない山本くんがわるいんだ、ということにしていた。

わかってはいるんだ。

さみしいんだ、俺は。

山本くんが、遠くに行ってしまった気がして。

俺と君は、この団地に引越してきてからずっと一緒に、小学校だって、中学の部活だって、科は違っけど高校だって、ずっとずっと一緒だったじゃないか。

わかってはいるんだ、人はいつかは去っていくって。

仲のいいダチだと思っていたヤツでも、次の日には会話もしなくなるってあるって。

まだ人生ほんのちょっとしか生きていないが、それなりにたくさん友達らしき人に出会い、それなりにたくさん遠ざかっていく人を見てきた。

セーブがきかず自分からケンカを売ってしまうことも多々あったし、気付いたらまったく連絡をとらない、メールを送っても返信がなくなる人にもたくさん会ってきた。

そつだ、人間関係は諸行無常なんだ。わかってはいるんだ、ずっと前から。

でも、君は違うんだと思っていた。

君だけは、俺とずっと仲のいい幼なじみであってほしいと思っていた。

我ながら、ものすごいエゴだ。

そんなエゴも、山本くんは許してくれると、期待と過信を抱いていた。

山本くん、君は、いつか俺の誘いも断るようになって、どこか遠くへ行くんだろ？  
故郷の田舎町よりももっと遠い、俺の車では行けないほど、遠くへ行ってしまっただろ？

「…ねえ、墨田くん」

「おおやっとな君は、自分から話しかけるようになったか」

決してやさしい口調ではないと、自負している。

どこかで君が呆れているかもしれないのも、感じている。

「僕さ、彼女ができたんだ」

「へっ、このリア充が」

大学行っただからって調子にのんなよ。

俺は厳しい上下関係と肉体労働と闘ってたぞ。

お前みたいな、大学で遊びながらのんきに彼女作ってるやつなんかとは、クオリティが違っただぞ。

「彼女によく、墨田くんのことを話すんだ。

いつもしっかりしていて、話題が豊富で、かっこよくて、僕の大親友なんだ、って。

よかったら、今度、彼女と会ってみない？

実際の墨田くんを見たら、びっくりすると思うんだ」

「…それは、」

俺のことを高卒の田舎者だと言って馬鹿にしたいのか、それとも、いちいち俺の期待に応えてくれるのか、それでも俺を『親友』と称すのか、

君の顔はほんのり紅く、まっすぐに進行方向を見つめている。

実際に大親友かとはともかく、もうちょっと仲良くしているのも悪くはないかもしれない。

「いいよ、面白そうだし」

中古の軽四をふかしまくって、山道を上りきった。  
左手一面に、高原が広がってきた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8450v/>

---

君と俺と、ドライブ。

2011年10月9日11時55分発行